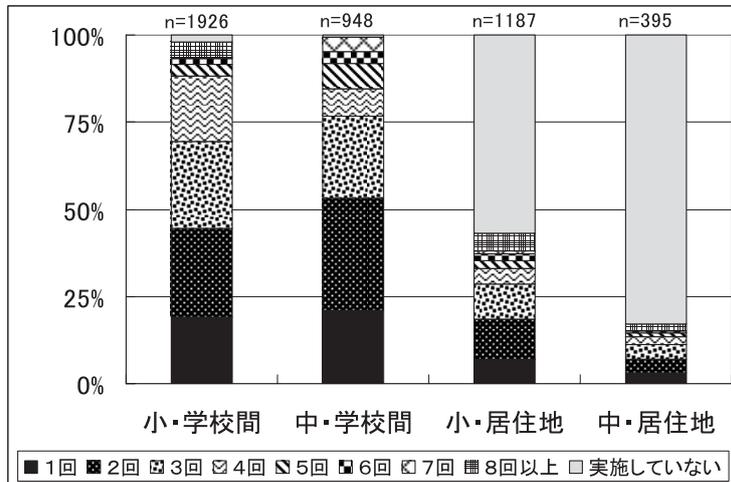


5. 肢体不自由養護学校

(1) 交流及び共同学習の実施状況について

①実施状況

図Ⅱ5-1に病弱養護学校における交流及び共同学習の実施状況を示した。



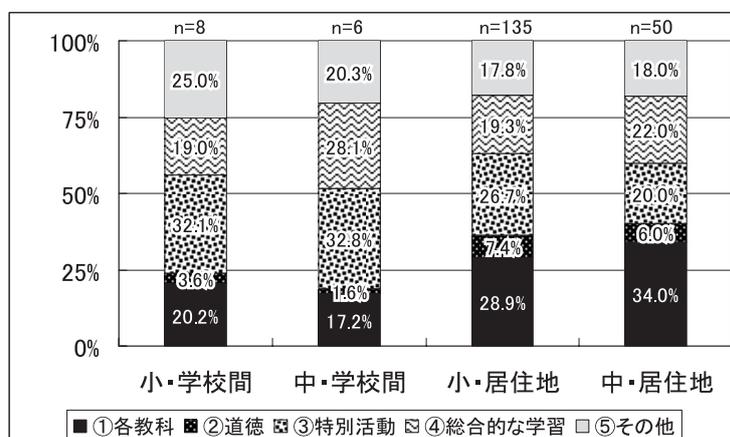
図Ⅱ5-1 交流及び共同学習の年間実施回数

学校間交流については、実施していない割合は小学部2.1%、中学部0.4%であり、多くの肢体不自由養護学校で学校間交流が実施されている実態がうかがえた。交流の回数については、小学部では、1回、2回、および3回が、それぞれ19.1%、25.6%、24.9%、中学部では1回、2回、および3回が、それぞれ21.0%、32.3%、23.4%となっており、年間に1回から3回の交流が一般的である様子が見える。

居住地校交流については、実施していないという割合が小学部では、56.9%、中学部では、83.0%となっている。学校間交流に比べて居住地校交流の方が、実施していない割合が圧倒的に大きくなっている。また、小学部より、中学部の方が居住地校交流を実施していない割合が増加していることがうかがえる。

②教育課程上の位置づけ

図Ⅱ5-2に肢体不自由養護学校における交流及び共同学習教育課程上の位置づけを示した。



図Ⅱ5-2 内容

肢体不自由養護学校における学校間交流について、小学部では、③特別活動（32.1%）、④総合的な学習（20.2%）、①各教科（19.0%）の順であった。中学部では、③特別活動（32.8%）、④総合的な学習（28.1%）、①各教科（17.2%）が多かった。

肢体不自由養護学校における居住地校交流について、小学部では、①各教科（28.9%）、③特別活動（26.7%）、④総合的な学習の時間（19.3%）の順であった。中学部では、①各教科（34.0%）、④総合的な学習の時間（22.0%）、③特別活動（20.0%）の順であった。小学部、中学部とも、学校間交流よりも、居住地校交流の方が、「①各教科」に位置づけられた実施の割合が多く見られた。

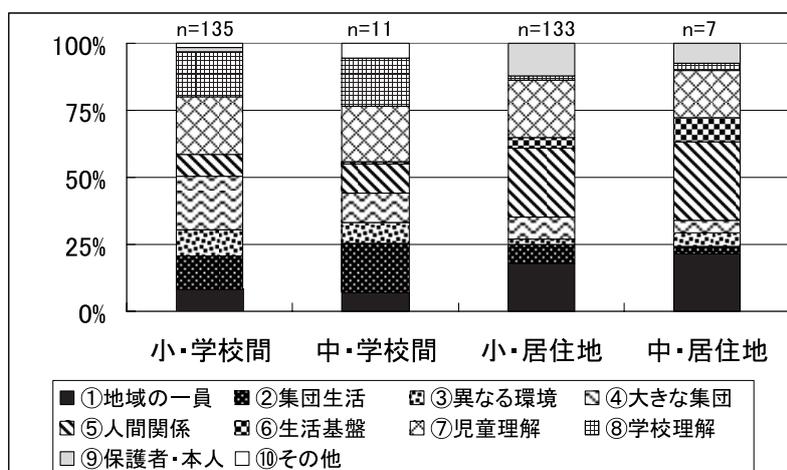
③交流の目的・ねらい

図Ⅱ 5-3 に、肢体不自由養護学校における交流及び共同学習の目的・ねらいについて示した。これについては、その他を含む10の選択肢の中から、特に重要と思われるものを3つ回答してもらった。

その結果、学校間交流については、小学部では、最も回答が多かったものから順に挙げると、⑦児童理解 21.5%、④大きな集団 20.0%、⑧学校理解 17.0%となった。中学部では、最も回答が多かったものから順に挙げると、⑦児童理解 20.7%、④集団生活 18.0%、⑧学校理解 18.0%となった。

居住地校交流では、小学部では、最も回答が多かったものから順に挙げると、⑤人間関係 25.6%、⑦児童理解 21.8%、①地域の一人 18.1%となった。中学部では、最も回答が多かったものから順に挙げると、⑤人間関係 29.1%、①地域の一人 21.5%、⑦児童理解 17.7%となった。

学校間交流、居住地校交流のどちらにおいても、児童理解を目的・ねらいとする割合が高い。居住地校交流では、「地域の一人」と「地域でのつながりや人間関係」「保護者・本人のニーズ」の割合が学校間交流よりも高くなっている。なお、小学校の学校間交流では「生活基盤」、中学部の学校間交流では「保護者・本人のニーズに定める」という回答は全くなかった。



図Ⅱ 5-3 目的・ねらい

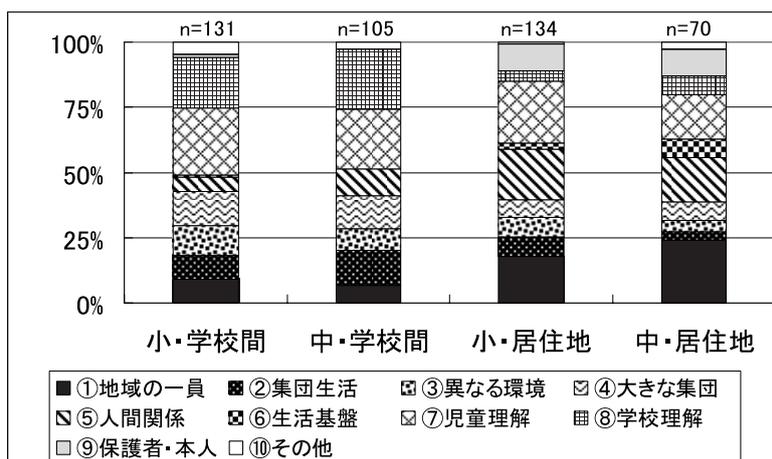
④ 成 果

図Ⅱ 5－4 に、肢体不自由養護学校における交流及び共同学習の成果について示した。これは、その他を含む 10 の選択肢の中から、あてはまるものを 3 つ回答してもらったものをまとめたものである。

その結果、学校間交流については、小学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、⑦児童理解 26.0%、⑧学校理解 19.1%、④大きな集団 13.0%、となった。中学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、⑦児童理解 22.9%、⑧学校理解 22.9%、④集団生活 13.3%、となった。

居住地校交流では、小学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、⑦児童理解 23.9%、⑤人間関係 19.4%、①地域の一員 17.9%となった。中学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、①地域の一員 24.3%、⑤人間関係 17.1%、⑦児童理解 17.1%となった。

全体的な傾向を見ると、前述④交流の目的・ねらいとおおかた似た傾向の結果となっている。学校理解、児童理解の回答が目的・ねらいよりもやや増えている。思った以上に児童理解、学校理解が深まるという成果が得られている、という現況が伺える。



図Ⅱ 5－4 成 果

⑤ 課 題

図Ⅱ 5－5 に、肢体不自由養護学校における交流及び共同学習の課題について示した。これは、その他を含む 10 の選択肢の中から、あてはまるもの全てを回答してもらったものをまとめたものである。

その結果、学校間交流については、小学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、②実施相手校の意識・理解について 24 件、①実施相手校の受け入れ体制について 12 件、⑤安全確保・緊急対応の問題 11 件、⑥付添 11 件、⑧経費 11 件となった。中学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、②実施相手校の意識・理解について 18 件、①実施相手校の受け入れ体制について 13 件、③安全・緊急 10 件となった。

居住地校交流では、小学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、①実施相手校の受け入れ体制について 32 件、②実施相手校の意識・理解について 31 件、⑥付添 25 件となった。中学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、①実施相手校の受け入れ体制について 12 件、②実施相手校の意識・理解について 9 件、⑥付添 8 件となった。

受け入れ体制、意識・理解、ほどの交流においても課題として多く挙げられている。肢体不自由養護学校の特色として「付添」、「安全・緊急」が課題に多く回答されている。

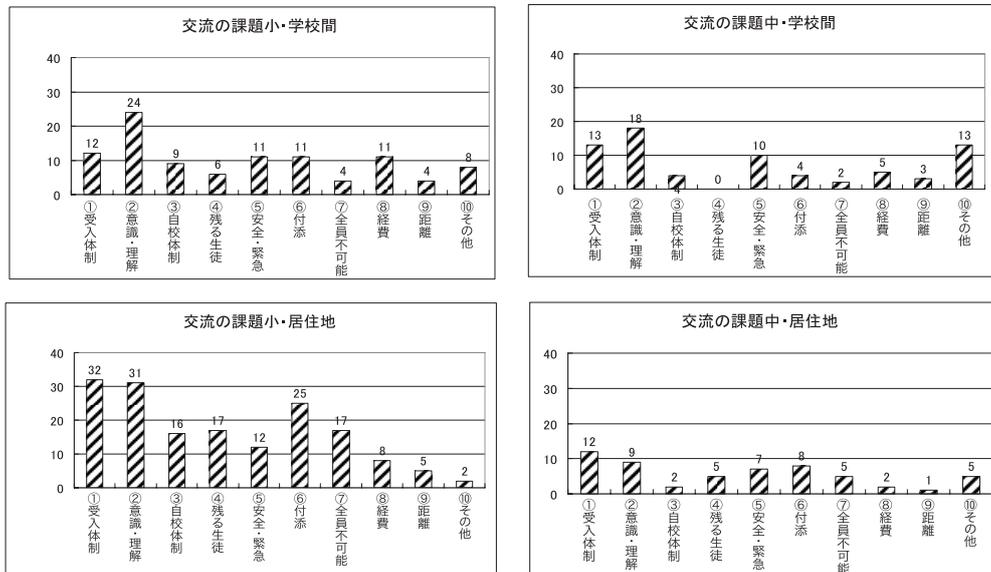


図 II 5 - 5 課題

⑥交流を実施していない理由

図 II 5 - 6 に、肢体不自由養護学校において交流を実施していない理由について示した。これは、その他を含む 14 の選択肢の中から、あてはまるもの全てを回答してもらったものをまとめたものである。

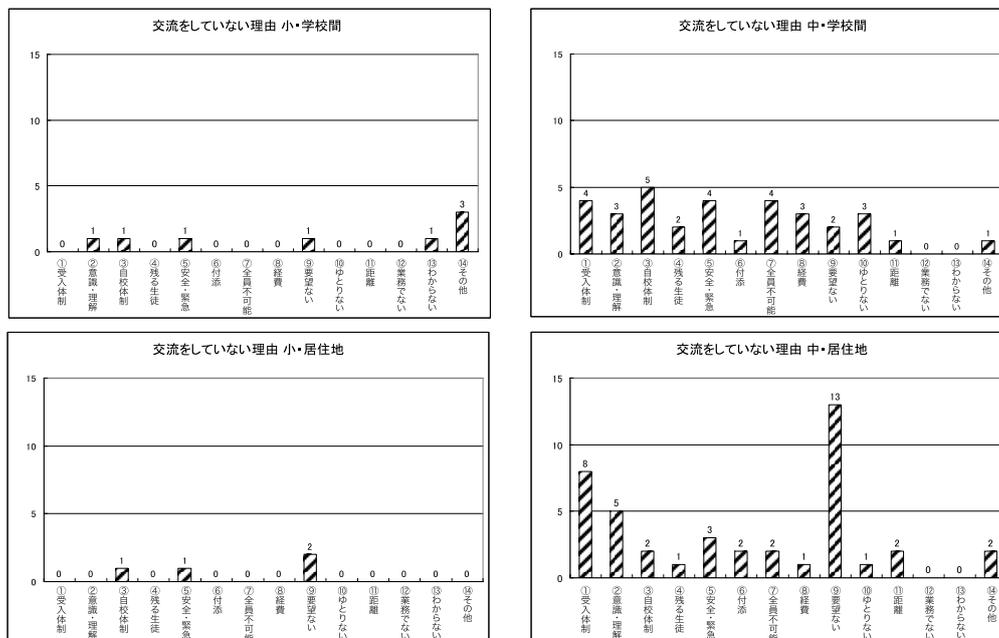


図 II 5 - 6 交流を実施していない理由

その結果、学校間交流については、小学部では、②実施相手校の意識・理解について1件、③自校（校内）の体制について1件、⑤安全確保・緊急対応の問題1件、⑨要望がない1件、⑬わからない1件、⑭その他3件となった。中学部では、最も回答の多かったものから順に上位を挙げると、③自校（校内）の体制について5件、①実施相手校の受け入れ体制について4件、⑤安全確保・緊急対応の問題4件、⑦全員不可能4件となった。

居住地校交流では、小学部では、最も回答の多かったものから順に挙げると、⑨要望がない2件、③自校（校内）の体制について1件、⑤安全確保・緊急対応の問題1件となった。中学部では、最も回答の多かったものから順に上位を挙げると、⑨要望がない13件、①実施相手校の受け入れ体制について8件、②実施相手校の意識・理解について5件となった。

（２）学校間交流における児童への配慮の実際

次の3つの条件に合う自校児童を1名（以下Aさん）選び、その児童に対する交流先での配慮の実際について記述してもらった結果をまとめた。3つの条件とは、昨年度（H16年度）に通常の学級と交流し、教科学習の経験がある、在籍する児童のうち、最も高学年である、障害種別や程度は問わない、の3つであった。自由記述を整理し、特徴的な回答内容を抜粋して挙げる。

①当該児童への配慮

- ・自己導尿、おむつ使用への配慮をする。
- ・教科、教育課程面で配慮をする。
- ・移動面での配慮をする。
- ・（発作時等に）医療的配慮が必要。
- ・（自分は身障児、交流先の児童は健常児であるという）精神面の配慮が必要。
- ・自分でできることはできるまで待ってもらおう。
- ・移動のペースをゆっくりにしてもらおう。
- ・通常の学習内容で実施する。工作など一部苦手とする活動での用具使用時に配慮する。
- ・校外での活動では日差しが強い時にサングラスを着用する。
- ・教科学習の進度や教育課程面について配慮する。
- ・トイレ、移動の介助について配慮する。
- ・学習に集中しやすい学級で受け入れてくれるため、受け入れ学級が年度途中で変わることもある。
- ・人みしりをするが人とのかかわりが好きなので常に声かけをして欲しい。

②施設設備など環境への配慮

- ・クラッチを用いて移動できるスペースを確保する。
- ・スロープを設置する。
- ・車いす対応のトイレ、ポータブルトイレを用意する。
- ・おむつ交換スペースを確保する。

- ・たたみスペース、手あらい用蛇口レバーがあると良い。
- ・教室を1階に設定する。

③集団参加への配慮

- ・担任同士が事前に打ち合わせを実施する。
 - ・A児の特性を伝えておく。
 - ・A児の疾病に配慮した学習内容を設定する。
- ・自己紹介カードや自己紹介ビデオを活用する。
- ・大きな集団では心細くなる性格のため、自分の意思の確認を担任教師が行う。
- ・必要以上に教師が介入しないように気をつけたりする。
- ・兄弟の学級に入る。
- ・初対面の人とは、会話が難しい。
- ・朝のHRの時、交流先の担任が、本児を紹介し、仲よくするように声かけしてくれている。
- ・事前に自己紹介文、写真を送っておく。

(3) 居住地校交流における児童への配慮の実際

学校間交流における児童への配慮の実際と同様の条件に合致する児童1名(以下Bさん)を選び、その児童に対する交流先での配慮の実際について記述してもらった結果をまとめた。自由記述を整理し、特徴的な回答内容を抜粋して挙げた。

①当該児童への配慮

- ・休み時間の人間関係の持ち方について配慮する。
- ・座席配置について配慮する。
- ・休憩室を確保する。(障害児学級の教室)
- ・保護者が付き添うが、教室の後ろやろう下など児童から少し離れたところから見守る形にさせてもらった。
- ・医療的対応の環境をつくる。
- ・給食を再調理する。
- ・普通にゆっくり話す。
- ・教育課程上の配慮をする。
- ・階段の昇降時、仲間にそばにいてもらう。
- ・学習進度を合わせるため、交流当日の学習内容(単元名、教科書のページ)を教えもらった。
- ・可能な限り在籍する他の生徒と同じように接してもらう。
- ・兄弟がいる。
- ・トイレ介助を行う。
- ・オムツ交かんスペースを確保する。

②施設設備など環境への配慮

- ・スロープ、エレベーターを設置する。
- ・車いす対応のトイレを設置する。
- ・養護学級で休憩をとる。
- ・おむつ交換スペースを確保する。
- ・人工呼吸器を使用する電源を確保する。
- ・イス・机を調節する。(すべり止め)
- ・教室内での机の位置について配慮する。(車イスでの出入りや移動距離への配慮)
- ・休息できるスペースを確保する。

③集団参加への配慮

- ・学校だよりや全校集会で周知したり、プロフィールや注意事項などを情報共有する。
- ・B児の疾病に配慮した学習内容を設定する。
- ・長時間にならないようにする。
- ・集団の規模を小さくする。
- ・事前に活動内容について担任間で調整し、事前指導が必要な場合は、担任が行う。
- ・児童どうしの手紙交流を行う。
- ・写真カードを活用する。
- ・急がさず、ゆっくりを心がける。
- ・事前に学校見学を行う。
- ・参加時間を少しずつ増やし、最終日は、一人で一日活動した。
- ・障害部位へ荷重負担とならないような体への接触の仕方などについて配慮する。
- ・交流先の担任等へBさんの特性を伝えておく。Bさんは普通小学校に在籍していたため、同級生が多数おり、本人の特性を知っている生徒が多かった。
- ・医療的な配慮が必要。
- ・生徒に事前指導をしてもらう。

(4) 学校間交流についての意見等 (自由記述)

- ・事前に名刺交換や手紙のやりとりを行った。

(5) 学校間交流を実施していない理由 (自由記述)

- ・小学部は、少人数であり、個々の居住地交流を大切にしたいため。
- ・一昨年は実施したが、昨年度からは行っていない。
- ・保護者のニーズが居住地校交流に集中しているため、そちらに力を入れているため。
- ・社会性や経験の幅を広げるために強く推進したい養護学校側と小学校側の意識の差がある。
- ・本校の近隣に居住している児童が少なく、保護者のニーズは居住地校交流の方が強い。

- ・ 該当者がいないから。
- ・ 肢体不自由養護学校に在籍する児童生徒の重度重複化は著しく、医療的ケア対象児をはじめ、交流活動を展開する上での様々な課題があり難しい面もある。
- ・ 交流教育は人権教育のひとつであるため、実施相手校においては系統的な指導計画の中で行われる必要があると思うが、実際には直接的交流をして終わりという印象を受ける。
- ・ 小・中学校で、いじめや不適應を経験してきた生徒がいる場合、配慮が必要である。
- ・ 今回のアンケートで、学校間交流について、初めて話し合った状態である。障害のある生徒と障害のない生徒が、お互いに知り合い、かかわりを深めることができるのなら、地域と連携し、積極的に取り組んでいけば良いが、課題は多い。まずは、本校としてどう考えるか、校内体制から作っていく必要がある。

(6) 居住地校交流についての意見等（自由記述）

- ・ 毎年、6月に相手校を訪問してその年度の交流計画を話し合うが、そのときに配慮事項を再確認してもらっている。
- ・ 教室までの移動の安全性に不安もあり、学級との交流ではなく、学校全体の行事への参加交流にしたため、6年になった今年は交流を中止にした。
- ・ 居住地校交流で交流する学年学級を固定しているので交流校学級担任に本児宅へ家庭訪問をしていただき、学級児童から質問等があった時に対応できるようになっている。

(7) 居住地校交流を実施していない理由（自由記述）

- ・ 本校は、今年度からの居住地交流を実施している。初年度の今年は小学部3年生を対象をしぼり、実施する計画である。
- ・ 制度上の問題によるところが大きい。
- ・ 将来、地域で暮らしていく上で、地域での理解者・支援者を増やしていくために意義があると思う。保護者の希望で始まるケースがほとんどであるが、何より本人にとって交流が楽しいもの、意味のあるものにならなくてはいけないと思う。そのため教員の支援や、相手校との意思疎通が大切である。
- ・ 毎年実施する方向だが、保護者及び相手校との関係で実施するに至っていない
- ・ 経費の問題が大きいように感じる（全員が夏季休業中など、授業に大きな影響がない時期を利用するなど交流できれば、良い面も多くあると考えるのだが）
- ・ 本人・保護者のニーズが土台となるが、その希望が今のところない。逆に、いじめや不適應により本校に転入学した生徒がいる。
- ・ 保護者からの希望があっても相手校の受け入れが整わないケースが多くて難しい面がある。

(渡邊 正裕)